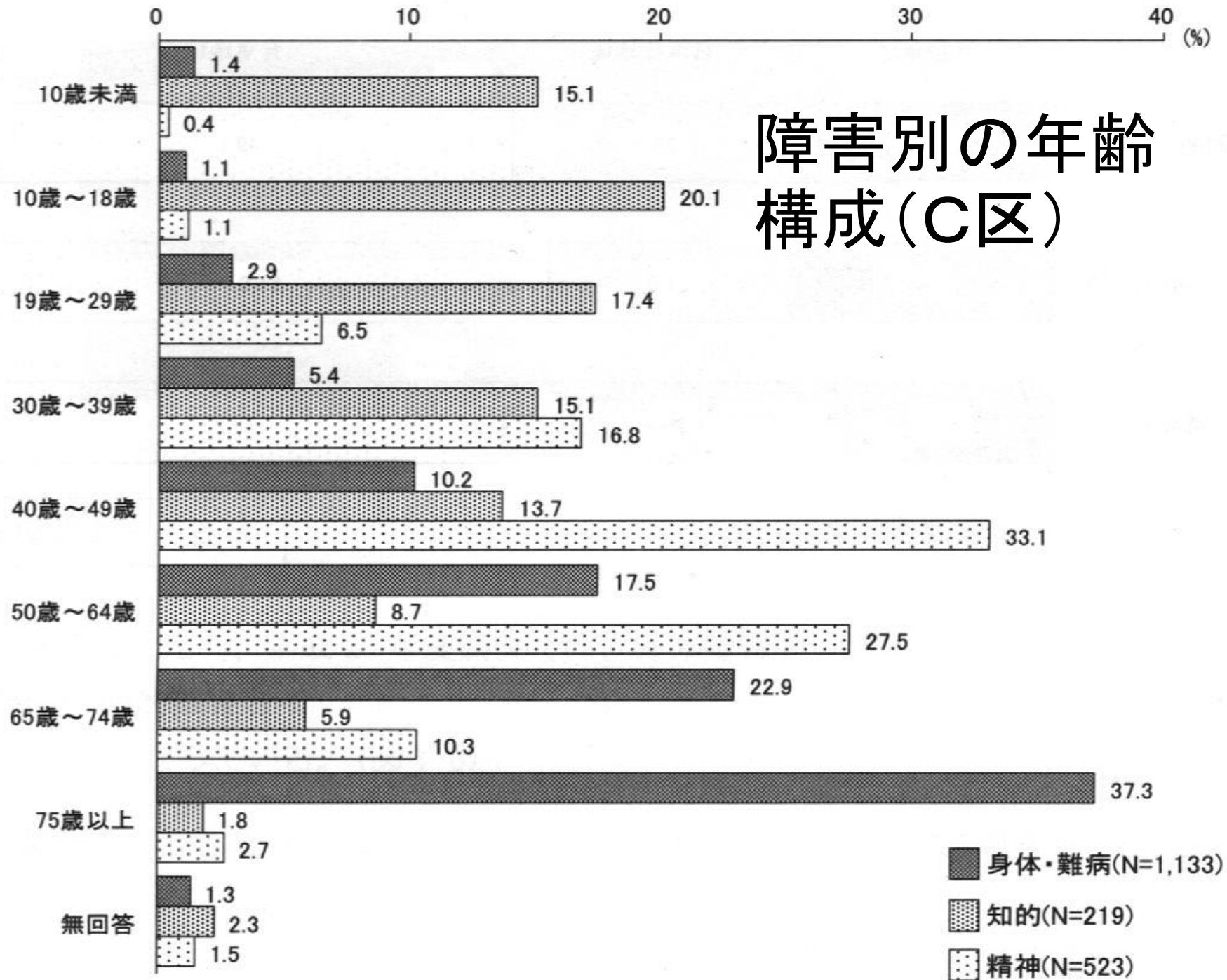


# 障害をもつ人と家族の実情

# 障害別の年齢構成(C区)



# 身体障害者の高齢化

- 脳性麻痺のために障害者総合支援法の障害支援区分6と判定されているAさん(70歳)は、頸髄症など二次障害の悪化はあるものの、支援を受けて単身生活を継続し、ときには外出や仲間との交流を楽しんでいる。
- 一方で、家族と同居してきた場合、介護者の機能維持や機器等を用いた介護力軽減の為の指導や新たに各種サービスの利用が必要となることが多い。

# 知的障害者と高齢化

- グループホームに入居している知的障害のBさん(50歳代)は、若い頃行っていた作業ができなくなり、別メニューの活動をするようになった。図書館が好きだったが、最近そこで失禁してしまうことがある。
- 家族と同居してきた場合、介護者の高齢化に伴い負担が増えて、子どもを「いい施設」に入所させたいと思いつつ、なかなか気持ちの整理がつかない状態で経過する場合も少なくない。

# 精神障害者と高齢化

- 統合失調症のCさん(60歳代)は若い頃入院歴があるが、その後再発せず、母親と二人で暮らしてきた。10年くらい前、地域活動支援センターに行かなくなり、今は家にいる。
- 最近母親が高齢(90歳代)となり、身のまわりのことをCさんがやらなければならなくなってきた。Cさんは「母が死んだら、自分も死ぬ」などと話すようになった。

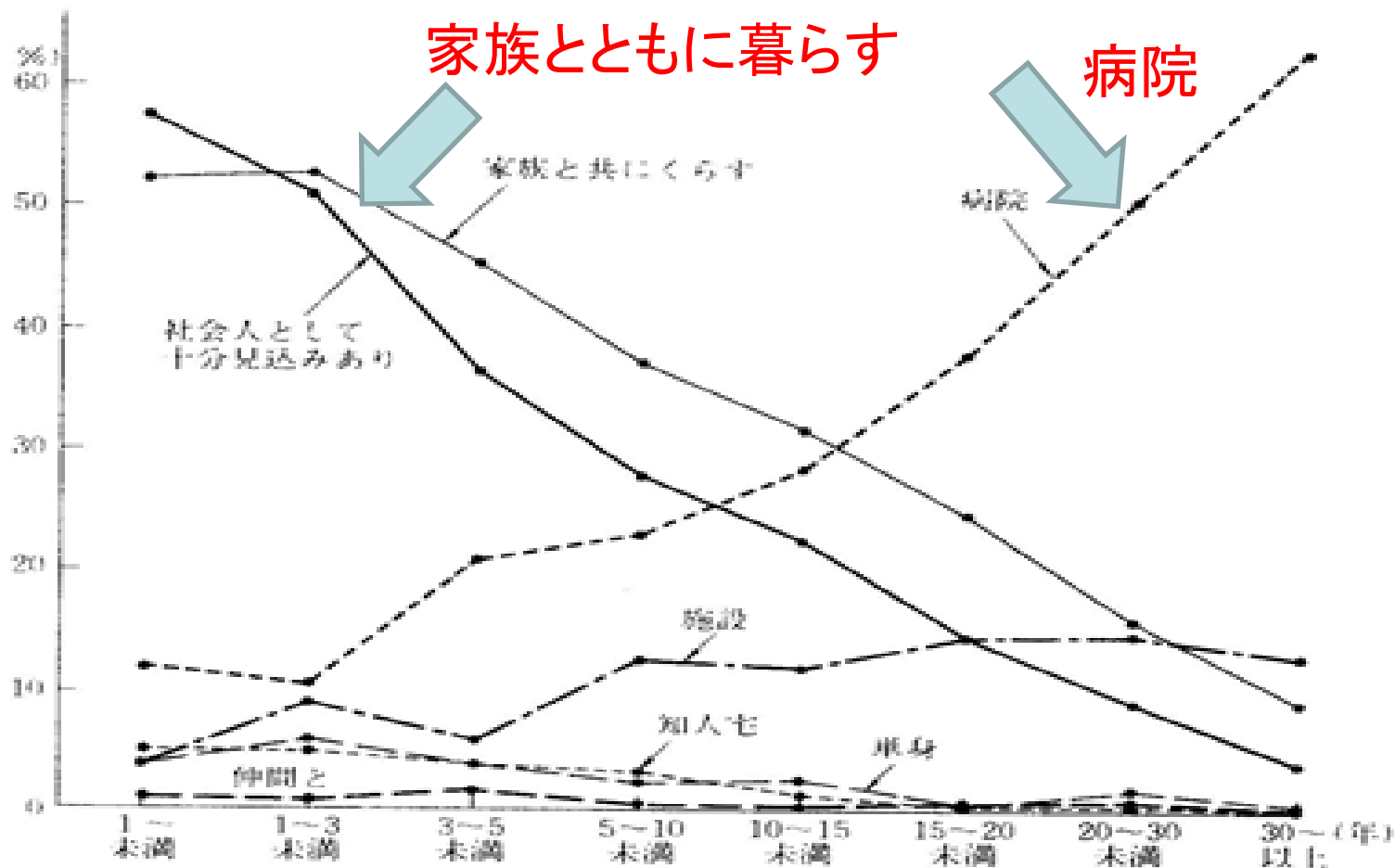
# 8050 問題

実は全国各地でも8050問題というのは非常に深刻ですよ。お年寄りと子供がいて、子供が障害を持っているなんていうのは非常に深刻になってきているわけで、そういうことに本当に対応できるのかということを考えなくてははいけません。施設だったら、そんなことは絶対考えなくても良かったのですが、在宅というのそれが全国各地でいっぱい出てきている。

(大橋謙策氏談)

# 患者の生活基盤に関する家族の考え

図3 発病からの年数別社会人としてやっていける見込み  
患者の生活基盤について家族の考え



出所) 「精神病の長期化と家族の対応」『精神衛生研究』28号, S. 57.

# 今高齢の親と障害をもつ人が暮らす家庭で 起きていること

- 自らが介護を受けている老親が、障害者の面倒を見ている
- 障害者が家族の介護をしている
- 親が亡くなり、障害者が入院を余儀なくされる
- 精神科への入院が必要と判断されたが、親の力が弱くて入院させられない
- 家族の治療や介護に障害をもつ子どもが干渉する



# 私の経験した8050問題

- 高齢の父親が長年引きこもっている息子のことで精神保健相談に訪れた。その後、勤務しているクリニックから往診をしていた。
- 約4ヶ月経ったとき、往診の連絡をすると息子が電話口にでた。「父は今いない」とのことで、その後2、3回かけても同様だった。
- そのような中で、別居している姉が訪問し、父が少し前に病死し、息子が約半月間死亡した父をそのままにしていたことが判明した。

# 家族の痛ましい事件(1)

- 和歌山の事件(平成27年2月)

81歳の父親が精神障害の41歳の長女を殺害。父親は、長年長女の暴力に苦しめられ、警察や保健所などは助けにならなかったと語った。

櫻井らは、同様な8件の事件について、報告している。

## 家族の痛ましい事件(2)

田部井恒雄氏(知的障害者通所授産施設職員)

平成16年1月勤務する施設(東京都内)に通う利用者が亡くなりました。

お母さんが癌にかかり、ご自分と知的障害のある息子さんの将来を悲観した無理心中でした。

この出来事で、当施設の利用者やその家族、私達職員は大きな衝撃を受けました。特に、家族の受けた衝撃は計り知れないものがあります。「**人ごととは思えない**」という実感です。

# 心中事件から見えてくる現実と課題

- 障害をもつ子が親の希望する支援を受けない。
- 親が望む社会資源が十分に存在していない。
- 「親亡き後」に関する情報が得られない、もしくはそれでも不安を解消できない。
- 親の心理的状況
  - 障害のある子供を自分と同一視してしまいがち。
  - 親が、心の余裕を持たず、思い詰めてしまう。
- 親が、相談や精神的ケアを受けることが不十分。
- 親が周囲から孤立してしまう。

# 「親亡きあと」から「親あるうちの自立」へ

精神疾患をもつ人と家族にも、高齢化の問題は避けて通れません。

自立の問題は、「親亡きあと」の問題ではなく、誰にとっても、現在の問題です。

病の軽重にかかわらず、本人と家族それぞれが自立して、人生を歩むことは可能です。

今、支援者は、「親あるうちの自立」について真剣に考える必要があります。

# 障害をもつ人の自立

- 自立の定義：  
できることは自ら行い、できないことは人に頼むことができる力を持つこと。
- 自立のために必要な要素：  
本人の生きる姿勢、希望  
コミュニケーションがとれる人間関係  
制度と社会資源

## 障害者の住みよい杉並を作る会 アンケートと7回連続討論会より 私たちが取り組みたいこと(一部)

- 本人が一人残されてからでは難しい。親がいる間に、生育歴や本人を知るノートを残すなどして、道筋ができるといい。
- 子に、将来親が先に死ぬと言うことを念頭に意向を聞いておく方がいい。
- 本人が社会の中で声を出す勇気・当たり前となれる状況・条件を作っていくことが必要。
- 親同士が訪問支援できるように取り組んでいる、自主活動への応援者を増やしたい。

# 精神障害者・親亡き後・自立プラン

## 千葉県精神障害者家族会連合会

### 親離れ 子離れについて

親はやれることを精一杯行いたい。完璧にはできないかもしれないが、子どもが生きていく道筋を作ろう。

◎衣食住を子どもが自らできるように、父母は身を引こう。

◎ 子との距離を意識的に広げよう、親が自ら離れるよう  
(一部紹介)



# 離家の勧め

- 知的障害の父母の試み
- 子どもが30歳頃、近くのグループホームに入居して貰う
- 父母は、土日に訪問したり、外泊で家で過ごさせたり、新しい応援の仕方に移行する。
- うまくいかなければ、改めて別のホームを探す。
  - 世帯を分けること
  - 家族と本人の間に第三者が入る関係

# 障害をもつ人の支援の在り方

## 国の施策：地域包括ケアシステムの構築

ニーズに応じた住宅が提供されることを基本とした上で、生活上の安全・安心・健康を確保するために、医療や介護、予防のみならず、福祉サービスを含めたさまざまな生活支援サービスが日常生活の場で適切に提供されることのできるような地域での体制

(地域包括ケア研究会、2010)

障害者と家族の課題も同様。

# その人らしく暮らすために

障害者の高齢化に生じる課題に対し、個別的に、解決できる制度設計を。

65歳を境に、介護保険に機械的に移行するのではない柔軟な対応が必要

- 早期から介護が必要になる場合
- 年齢に関係なく障害者総合支援法の訓練系の事業が必要となる場合
- その事業の高齢者版が必要となる場合

# 家族みんなが幸せに暮らすために

- 縦割を排し、「家族丸ごと」の支援を可能にする制度に向かって。
- 現実には、制度の縦割と支援観の隔たりが相互理解を阻んでいる。
- 介護保険のケアマネージャーと障害福祉サービスの相談支援専門員の双方が「共通の頭」をもって連携する必要。

# 家族みんなの声に耳を傾ける

- 「家族丸ごと」の支援には、家族成員全員と関わることが求められる。
- 家族の中に悪者を作らず、家族が協力できる関係を取り戻すことが目標。
- 私たちは、メリデン版訪問家族支援プログラムの普及に取り組んでいます。

# 家族のストレスマネジメント ファルーン他著白石、関口監 訳 金剛出版

メリデン版訪問家族支援プログラム  
の基本について解説している。

家族全員がそれぞれの自立  
に向けて会話し、協力関係の  
中で、問題解決する能力をつ  
けるための技法

関心ある方は研修に参加して  
ください。

## 家族のストレス・マネジメント 行動療法的家族療法の実際

イアン・R・H・ファルーン, マーク・ラポータ,  
グレーン・ファデン, ヴィクター・グラハム・ホール  
白石弘巳・関口隆一 監訳

## MANAGING STRESS IN FAMILIES Cognitive and Behavioural Strategies for Enhancing Coping Skills

Ian R.H.Falloon,  
Marc Laporta,  
Gráinne Fadden and  
Victor Graham-Hole



金剛出版

## 求めてこない人にも関わる(アウトリーチ)

- 支援はあるのに利用しない人がいる。
- 求めてこない人を後回しにしたのが、これまでのシステム。
- 求めてこない人には、本人の希望を確かめながら、粘り強く関わる必要がある。
- 支援を希望する人のウィッシュ(wish)と、支援を提供する人が考えるニード(need)は異なることが多い。まずはWishから関与する。



# 支援としてのコミュニケーション

- コミュニケーションは、関係を作り、維持するための手段（「関係なくして支援なし」）
- コミュニケーションの目的は、理解すること。すなわち、相手を肯定すること。
- コミュニケーションの技法とは、考えの違う人同士が、対立せず、共存できるように調整すること。（お互いの居場所を作る）

# 本人のニーズへの直面化

- 利用者の「自分らしさ」を尊重するが、専門家は自らの専門性を前面に出す必要もある。
- 例えば、入院が必要と判断したら、その必要性を訴え続けること。
- 問題はその方法。

「直面化」(動機付け)を踏まえたエンパワーメント支援という考え方

# 幅広い支援のネットワークを作る

- 専門職だけで支援は完結しないことが多い。
- さまざまなレベルの支援のネットワークが大切。
- さまざまな事例が紹介されてきている。

世田谷区の地域包括ケアシステム

秋田県藤里町の全ての要社会的援護者を地域全体で見守るネットワークの構築

等々

おわりに:「ゆったりとつながり、  
負けないで生きていける社会を」

# ソーシャル・キャピタルの重要性

## 少子高齢化時代のまちづくり

- あらゆる人が街の一部。
  - 現在、障害をもつ人や家族の中には、孤立している人が少なくない。
  - 孤立しなくなれば、随分生きやすくなる。
  - 人は多くの人とゆるくつながっているとき、自由と幸せ（満足）を感じる傾向が高まる。
- 今こそ、誰にとっても住みやすいまちづくりの実現に向かってともに考えるとき。